

論文審査の結果要旨

論文題名：

回復期脳卒中患者を対象とした表情刺激に対する注意バイアスの横断研究

申請者氏名：滝澤 宏和

審査の所見

<論文課題概要>

本論文は、脳卒中患者の表情刺激に対する注意バイアス（AB）に関する特徴を明らかにしようとする研究である。

<研究内容>

脳卒中後うつ病は脳卒中発症患者の約30%に生じ、日常生活動作の回復遅延やQOLの低下など、リハビリテーションに悪影響を及ぼすとされる。抑うつ患者には、陰性情動を惹起させる事象に注意が向きやすい注意バイアス（AB）が見られるが、脳卒中患者のABに関する研究報告はなく、その特徴は不明である。本研究では、うつ症状のある脳卒中患者は、うつ症状のない患者よりも中立的な表情を選択するための反応時間（RT）が短いという仮説の実証、抑うつに関連するRTの変化に対する認知機能の影響を明らかにした、意義ある研究である。

ABは注意バイアス修正アプリケーションを使用して、同時に提示された2つの画像から中立表情を選択する課題を128回測定し、反応時間（RT）を計測した。61名の脳卒中患者が分析された結果、抑うつ群と非抑うつ群との間で、RTの違いは検出されなかった。軽度認知障害の患者では、抑うつ群と非抑うつ群との間に有意なRTの差はなかった。一方、軽度認知障害のない患者では、抑うつ患者は有意にRTが短いという結果が得られた。

<科学的到達・新規性>

審査では、学位論文申請者に対して、ドットプローブ課題を使用しなかったことや抑うつ症状の評価にBDI-IIを使用した理由、統計で用いた多重比較の方法、軽度認知障害を有しない抑うつ患者のRTが短かったという結果への社会情動的選択理論（SST）を含めた考察、研究の意義や結果の臨床への活用の可能性についての質問が出されたが、いずれについても根拠に基づいた確かな回答がなされ、新規性ととともに、科学的到達を担保することにつながった。

<発展>

調査対象の脳卒中患者620人のうち、基準を満たす最終的な対象者は61人であり、対象者の確保は難しく、データ収集に時間を要する研究であった。研究結果から、軽度認知障害のない脳卒中後うつ病患者に対しては、ABを修正する余地は少なく、その代わりに認知行動療法の適応が考えられるなど、リハビリテーションへの新たな示唆が得られた

点は、博士論文として評価できる。

以上のことから、本論文は博士（健康科学）の学位授与に値するものとして認める。

【審査員】

主査：埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科 教授 横山 恵子

副査：埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科 教授 金村 尚彦

副査：鹿児島大学医学部 教授 田平 隆行